

## ダニエル書 - 第七十九番

1888年の反逆の解明：ラオディキア的アドベンティズムの第二世代からの教訓

Jeff Pippenger  
2024-02-12

ラオデキヤ的アドベンチズムの第二世代は1888年に到来し、その世代はエゼキエル書8章において、「彼の想像の部屋」によって表される第二の忌むべきものとして象徴的に示されている。

そこで私は中に入り、見た。すると、あらゆる這うものの形、忌むべき獣、そしてイスラエルの家のすべての偶像が、周囲の壁いっぱい描かれていた。彼らの前にはイスラエルの家の長老七十人が立っており、その中にシャファンの子ヤアザンヤがいて、各々が手に香炉を持ち、香の濃い煙が立ち上っていた。すると彼はわたしに言った。「人の子よ、あなたは見たか。イスラエルの家の長老たちが暗闇の中で、それぞれ自分の像の部屋で行っていることを。彼らは言う、『主はわれらを見ておられない。主は地を見捨てられた』と。」エゼキエル書 8:10-12。

想像の密室は、古の人々として描かれている者たちの心のうちにある邪悪な秘密を表しており、彼らはその邪悪そのものを、自らの心の密室にとどまらず、神の聖所の部屋にまで持ち込んだ。

よこしまな目を持つ者のパンを食べるな。そのごちそうを欲しがらな。彼は心で思うとおりの人間なのだ。「食べよ、飲め」と彼はあなたに言うが、その心はあなたとともにない。箴言 23章6、7節

図像の間の邪悪さは、神殿の壁にも、古代の人々の心の中の壁にも、書き記されている。エゼキエル書八章における第二の忌むべきこと、すなわち秘密の図像の間は、ラオデキヤ的アドベンチズムの第二世代を表している。そして四つの忌むべきことのうち、この第二のものは、特に時間をかけて組織ぐるみの反逆を強調しているが、四つすべてが、民の守護者であるはずの者たちによって行われたものとして描かれている。

「行われているすべての忌まわしいことのために嘆き叫ぶ者たち」の上に、救いの印が押された。いまや死の天使が出て行く。エゼキエルの幻では、殺戮の武器を持つ人々によって表されており、彼らには次の命令が与えられる。「老人も若者も、処女も幼子も女も、ことごとく打ち殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」預言者は言う。「彼らは家の前にいた年老いた者たちから始めた。」（エゼキエル9:1-6）滅びの業は、民の霊的な守護者であると自称してきた者たちの間から始まる。偽りの見張り人たちが最初に倒れる。哀れむ者も容赦する者もない。男も女も、処女も幼子も、ともに滅びる。『大争闘』656頁。

第二世代の到来を特徴づける反逆は、1888年のミネアポリスでの総会で成就したとおり、ラオデキヤ的アドベンチズムの指導層と特に結び付けられている。それは「イスラエルの家の長老たち」および「七十人」という表現によって表されている。モーセの働きには

七十人の長老が関わっており、イエスの第二の弟子団も七十人で構成されていた。「七十」は「長老たち」と同様に指導層を象徴する。第二の忌むべきことは指導層をいっそう強調し、そうすることで、その忌むべきことが指導層の組織的反逆と結び付いている点を強調する。

七十人の古老たちのただ中に、「シャファンの子ヤアザニヤ」が立っていた。「ヤアザニヤ」という名は「神に聞き入れられた」を意味し、彼は、まさに神が語っておられたときに反逆した指導者層を象徴している。彼は神の声を聞きながらも耳を傾けようとせず、神はご自分の民を見捨て、密室で起こっていることをご覧にならないのだと公言していた。ヤアザニヤは「シャファンの子」であり、「シャファン」という名は「隠す」を意味する。第二世代という構図は、神が語っておられたまさにその時に反逆した指導部の反乱を表しており、彼らは神が自分たちの行為をご覧にならず、心にも留めておられないと信じていた。

ホワイト姉妹は、1888年の総会の期間中、ラオデキヤ的アドベンチズムの指導部の会話を示されたと記録している。1888年の総会で、神は、神が聞いていないと思い込んで指導者たちが内輪で行っていた会合を、ホワイト姉妹に示した。彼らは私室の密やかな場で、ホワイト姉妹とその息子、ジョーンズ長老とワグナー長老を誹謗中傷した。私的な居室にいる自分たちを神は見られないのだから自由に話せると彼らは信じていたが、神はこれらの会話そのものをこの女預言者に示した。彼らは教団の会議の場におり、靈感によれば後の雨のメッセージを聞いていたのに、耳を貸そうとはしなかった。

ホワイト姉妹がコラ、ダタン、アビラムの反逆になぞらえるほどの公然たる反逆を1888年に示した指導部を、何が生み出したのか。

聖霊に照らされるなら、あなたはミネアポリスでのあの邪悪を、あるがままに、神がそれをご覧になるとおりに見るようになるでしょう。もしこの世で二度とあなたに会うことがないとしても、あなたが何のゆえもなく私に負わせた悲しみと苦悩、そして魂の重荷について、私はあなたを赦していることを確信してほしい。しかし、あなたの魂のために、またあなたのために死なれた方のために、あなたが自分の誤りを認め、告白してほしい。あなたは神の御霊に逆らった者たちに加わったのです。主がジョーンズ兄弟とワグナー兄弟を通して働いておられたことについて、あなたには必要なだけのすべての証拠が与えられていたのに、あなたはその光を受け入れませんでした。そして、感情に身を任せ、真理に逆らう言葉を口にしたあとで、自分が過ちを犯したこと、彼らが神からのメッセージを携えていたこと、そしてあなたがメッセージと使者の双方を軽んじていたことを、告白する気にはなれなかったのです。

私は、ミネアポリスで表れたような、これほど確固たる自己満足と、光を受け入れ認めようとしない心を、私たちの民の間にかつて見たことがありませんでした。私は、あの集会で示された精神を大事にした一団のうちのだれひとりとして、彼らが高ぶりを捨ててへりくだり、神の御霊に動かされていたのではなく、むしろ思いと心が偏見で満ちていたのだと告白するまで、天から彼らに送られた真理の尊さを見分ける明確な光を再び持つことはない、と示されました。主は彼らに近づいて彼らを祝福し、彼らの退転をいやすことを望まれましたが、彼らは聞き入れませんでした。彼らは、コラ、ダタン、アビラムを駆り立てたのと同じ精神によって動かされていました。イス

ラエルのあの人々は、自分たちが誤っていることを証明するあらゆる証拠に逆らうことを固く決め、多くの者が引き込まれて彼らに合流するまで、離反の道を歩み続けました。

彼らは誰であったのか。弱い者でも、無知な者でも、見識のない者でもなかった。その反逆には、会衆のうちに名のある二百五十人のつかさたち、名望ある人々がいた。彼らの主張は何であったか。「会衆はみな、すべてが聖であり、主は彼らのただ中におられる。それなのに、あなたがたはなぜ主の会衆の上に自らを高くするのか。」[Numbers 16:3] コラとその仲間が神のさばきのもとで滅びたとき、彼らに欺かれていた民は、この奇跡に主の御手を見なかった。翌朝、全会衆はモーセとアロンを非難して、「あなたがたは主の民を殺した」[Verse 41]と言い、疫病が会衆に及び、一万四千人を超える者が滅んだ。

私がミネアポリスを去ろうと決心したとき、主の使いが私のそばに立って言った。「そうしてはならない。神はこの場所であなたに行うべき働きを与えている。人々はコラ、ダタン、アビラムの反逆を繰り返している。光のうちにはいない者たちはそれを認めようとしないが、わたしはあなたをしかるべき位置に置いた。彼らはあなたの証しに耳を貸さない。だが、わたしはあなたと共にいる。わたしの恵みと力があなたを支える。彼らが悔んでいるのはあなたではなく、わたしの民に送る使者と、わたしが送る言葉である。彼らは主の言葉を軽んじた。サタンは彼らの目をくらませ、判断を歪めた。そして、各々の魂がこの罪、すなわち神の霊を侮辱するこの聖められていない独立心を悔い改めないなら、彼らは闇の中を歩むだろう。彼らが悔い改めて立ち返り、わたしが彼らを癒やすようにならないなら、わたしは燭台をその所から取り除く。彼らは霊の視力を曇らせてしまった。彼らは神がその霊とその力を現すことを望まない。というのは、彼らがわたしの言葉をあざけり、嫌悪する霊を持っているからである。軽薄さ、軽んじること、たわむれや冗談が日々行われている。彼らは心を定めてわたしを求めていない。彼らは自分で焚きつけた火の火花の中を歩み、悔い改めないなら悲しみのうちに身を横たえることになる。主はこう言われる。務めの持ち場に立て。わたしはあなたと共におり、あなたを離れず、あなたを見捨てない。」神からのこの言葉を、私はあえて無視することはできなかった。

バトルクリークには、澄みわたる明るい光が輝いてきた。しかし、ミネアポリスでの会議に関わった者たちのうち、誰が光のもとに来て、主が天から彼らに送られた豊かな真理の宝を受け取ただろうか。指導者であるイエス・キリストと歩調を合わせ続けてきたのは誰か。自分たちの誤った熱心、盲目、ねたみと邪推、真理への反抗を、十分に告白したのは誰か。ひとりもない。そして、長く光を認めることを怠ってきたため、光は彼らをはるか後方に置き去りにした。彼らは、わたしたちの主キリスト・イエスにある恵みと知識において成長してこなかった。彼らは、本来受けることができ、信仰経験において彼らを強い者としたはずの、必要な恵みを受け損ねてきた。

ミネアポリスで取られた立場は、見たところ打ち破りがたい障壁であり、かなりの程度において、彼らを疑う者、問いただす者、そして真理と神の力を拒む者たちと同じ陣営に閉じ込めてしまった。次の危機が来るとき、証拠に証拠を重ねて積み上げられたものに長らく抵抗してきた者たちは、彼らがあればほど明白に失敗したその点で再び試されるだろう、そして彼らにとって、神からのものを受け入れ、闇の力からのもの

を拒むことは難しいだろう。ゆえに、彼らにとって唯一安全な道は、謙遜のうちに歩み、自分たちの足のためにまっすぐな道を整えて、足のなえた者が道を踏み外すことのないようにすることである。私たちが誰と交わるかはすべてを左右する。神とともに歩み、神を信じて頼る人々と共にいるのか、それとも自分たちの思い込みの知恵に従い、自ら起こした火の火花の中を歩む人々と共にいるのか。

真理に逆らって働いてきた者たちの影響力を打ち消すために要する時間と配慮と労苦は、甚大な損失であった。というのも、私たちは霊的知識において何年も先を行っていたかもしれない、また、光のうちに歩むべきであった人々が主を知ることを探め続け、その出で立ちが暁のように確かであることを知っていたなら、実に多くの魂が教会に加えられていたかもしれないからである。しかし、神がご自分の民に送られる真理に対して花崗岩の壁のように立ちはだかってきた働き人たちの影響力を打ち消すために、まさに教会の内部でこれほど多くの労苦を費やさねばならないとき、世は相対的な暗闇の中に取り残されてしまう。

「神は、見張り人たちが立ち上がり、声を合わせて断固たるメッセージを発し、ラッパに確かな響きを与えることによって、人々が皆、自分の務めの持ち場に一斉に就き、この大いなる働きにおいて自分の役割を果たすようになることを意図しておられた。そのとき、天から大いなる力をもって下ってくるあの別の天使の強く澄んだ光が、その栄光によって地を満たしていたであろう。私たちは何年も遅れている。そして、盲目のうちに立ち、神が燃える灯のようにミネアポリスの会議から出ていくことを意図されたまさにそのメッセージの前進を妨げた者たちは、神の御前に心を低くし、自分たちの思いの盲目さと心のかたくなさによってこの働きがどのように妨げられてきたかを見て理解する必要がある。」 『Manuscript Releases』第14巻、107-111。

1888年に、ホワイト姉妹がコラ、ダタン、アビラムの反逆になぞらえるほどの公然たる反逆を示した指導部は、何によって生み出されたのか。答えは、疑いなく1863年の反逆にある。これは、エゼキエルに告げられた、さらに大いなる忌むべき事からへの道を整えた。レビ記26章の「七つの時」を退け、偽の図表を導入することは、1863年の偽物を擁護し続ける必要を生み出すことになる。こうして、ミラーは、自らの宝石が散らされ、がらくたや偽の宝石や硬貨に覆い隠されていくのを見守ることになる。世間でよく言われるように、「歴史は勝者によって書かれる」。

実際には勝者ではないにもかかわらず、ラオデキアのアドベンチスト教会を率いる者たちは、四世代にわたって増大する反逆を正当化する歴史物語を作り上げることに時間と労力を費やしてきた。これは、その反逆を、天の御使いたちが記録した実際の歴史とはかけ離れた見方で見せようとする試みである。歴史の書き換えはカトリック教会のイエズス会の際立った特徴であり、歴史修正主義はラオデキアのアドベンチスト系歴史家たちの常套手段となってきた。昨今、ラオデキアのアドベンチストの「歴史家」たちがミネアポリス総会について書いていることは、歴史修正主義の典型的な一例である。

その会議にいた反逆者の中には、最終的に悔い改めた者が少数いたかもしれない。しかし、例外があるからといって原則が否定されるわけではない。コラ、ダタン、アビラムの反逆が繰り返されていたため、ホワイト姉妹はその場にとどまり、会合を記録するよう命じられた。アドベンチストの歴史家たちが、証言を「信仰による義」のメッセージが理解

されたのかされなかったのか、拒否されたのかされなかったのか、あるいはその後受け入れられたのかどうかという観点で構成することは、コラ、ダタン、アビラムに象徴される反逆に関する靈感による証言を回避することにほかならない。

その三人の反逆者のうち、モーセの記録が示すところでは、のちに悔い改め、モーセと共に指導部に再び受け入れられたのは誰ですか？

この動きの首謀者であったコラは、コハテの家系に属するレビ人で、モーセのいとこであり、才覚と影響力を備えた人物であった。彼は幕屋での奉仕に任じられていたが、自らの地位に不満を抱き、祭司職の位を望むようになっていた。もともと各家の長子に委ねられていた祭司の職分がアロンとその一族に与えられたことは、ねたみと不満を引き起こし、コラはしばらくの間、あからさまな反乱には踏み切らずに、密かにモーセとアロンの権威に反対していた。やがて彼は、世俗の権威と宗教的権威の双方を打ち倒すという大胆な企てを抱くに至った。彼は共鳴者を見つけるのにも事欠かなかった。幕屋の南側、コラとコハテ族の天幕のすぐ近くにはルベン族の宿営があり、その族の二人の族長であるダタンとアビラムの天幕はコラの天幕のそばにあった。これらの族長はたやすく彼の野心的な企てに加わった。彼らはヤコブの長子の子孫であることを根拠に、世俗の権威は自分たちに属すると主張し、祭司職の栄誉をコラと分け合うことを決意した。

民の間の心情は、コラの企てに有利に働いていた。失望の苦さのあまり、かつての疑い、嫉妬、憎しみがぶり返し、再び彼らの不平は忍耐強い指導者に向けられた。イスラエルの人々は、自分たちが神の導きのもとにあるという事実を、絶えず見失っていた。彼らは、契約の使者が自分たちの目に見えない指導者であり、雲の柱に覆われてキリストの臨在が彼らの前を進み、モーセがその方からすべての指示を受けていたことを忘れていた。

「彼らは皆が荒野で死なねばならないという恐ろしい宣告に屈することをよしとせず、したがって、彼らを導き、彼らの破滅を言い渡したのは神ではなくモーセだと信じるための、あらゆる口実に飛びつこうとしていた。地上で最も柔和な人の最善の努力をもってしても、この民の反抗は鎮められなかった。しかも、前の頑なさに対する神の不興のしるしは、乱れた隊列や欠けた人数となってなお目の前にありながら、彼らはその教訓を心に留めなかった。彼らは再び誘惑に屈した。」『族長と預言者』395、396ページ。

ラオデキア派アドベンチズムは1856年に始まり、1863年には法的に登録されたラオデキア派アドベンチスト教会となった。以前の記事で述べたように、ラオデキアが救われるという靈感に基づく証言は存在しない。自らの状態を悔い改め、フィラデルフィアに象徴される経験を受け入れない限り、救われることはできない。ラオデキアは、主の口から吐き出されることによって裁かれる民である。ラオデキアの教会として、靈感は、その教会が古代イスラエルがそうしたように荒野をさまよう運命にあったことを示している。

古代イスラエルの反逆者たちのうち、荒野を四十年さまよい、その後約束の地へ入ったのは誰か？

誰ひとりいなかった。そして彼らの放浪は、現代のイスラエルの放浪を象徴していた。

コラ、ダタン、アビラムの反逆（1888年の反逆を象徴していた）は、民に対し荒野で四十年間さまようことを命じた裁きを、彼らが受け入れようとしなかったことに基づいていた。1888年の反逆は、指導部が、自分たちをラオデキアとし、不従順のゆえに荒野でさらに長い年月さまようよう命じたという宣告を拒絶したことに基づいていた。

「A. T. ジョーンズとE. J. ワグナーによって私たちに与えられたメッセージは、ラオデキアの教会への神のメッセージであり、真理を信じると称しながら、神から授けられた光を他者に映し出さない者には災いあれ。」『1888年資料』1053.

1888年に民の守護者となるはずだった長老たちは、自分たちは「富み、財を増した」のだと信じていた。1888年に先立ってこの状態を生み出したものが何であったのかは、次の記事で考察する。

光と真理を与えられてきたはずの者の中に、サタンの欺瞞をいかに速やかに受け入れ、偽りの聖さに魅了されてしまう者がいるのを見ると、私の魂は非常に悲しまされる。主が、私たちが預言によって示された自らの立場を理解できるようにと据えられた標石から人々が背を向けるとき、彼らは自分たちがどこへ向かっているのかも知らずに進んでいく。

真の反逆がそもそも治り得るのかどうか、私は疑問に思う。『族長と預言者』で、コラ、ダタン、アビラムの反逆を学びなさい。この反逆は二人にとどまらず、さらに広がった。それは、会衆の名の知られた首長二百五十人に率いられていた。反逆は反逆、背教は背教と正しく呼び、そして、神の古代の民の経験が、その好ましくない点も含めて、歴史に残るよう忠実に記録されたことを考えなさい。聖書はこう宣言する。「これらのことは……世の終わりに臨んだ私たちへの戒めのために書かれているのです」。そして、真理の知識を持つ男女が、自分たちの大いなる導き手からあまりにも遠く離れて、背教の大指導者を「我らの義であるキリスト」と呼ぶまでになってしまうとしたら、それは彼らが真理という鉱脈を深く掘り下げていないからである。彼らには、尊い鉱石と卑しい材料とを見分けることができない。

異端を携えて入り込み、できることなら選ばれた者たちさえ欺こうとする偽預言者について、神の御言葉の中で豊かに与えられている警告を読みなさい。これほどの警告があるのに、なぜ教会は偽と真とを見分けることができないのか。いかなる形であれこのように惑わされた者は、あまりにもたやすく迷わされたゆえに、神の御前にへりくだり、心から悔い改める必要がある。彼らは真の牧者の御声と、見知らぬ者の声とを聞き分けなかった。そのような者は皆、自らの経験のこの章を省みなさい。

半世紀以上にわたり、神は御霊の証しを通して、ご自分の民に光を与えてこられた。これほどの時を経てなお、わずかな男たちとその妻たちが、ホワイト夫人を詐欺師で人を欺く者だと断じ、信徒から成る教会全体を欺きから解き放つ役目を負うというのか。「その実によって、あなたがたは彼らを知るであろう。」

神が彼らに与えたすべての証拠を無視し、その祝福を呪いに変える者は、自分の魂の安全のために震えおののくべきである。彼らが悔い改めないなら、その燭台はその場所から取り去られる。主は悔られた。第一、第二、第三の天使のメッセージの真理の旗印は、塵にまみれて地に引きずられたままにされている。見張り人たちがこのような

仕方で民を迷わせるに任されるなら、神は、ご自分の群れにどのような糧が与えられているのかを見抜く鋭い識別力を欠いたことに関して、ある魂たちに責任を負わせるだろう。

背教はこれまでも起こってきた。主は、民が、人間の言葉に頼って、ベレヤの高潔な人々がそうしたように自分で聖書を調べ、これらの事が本当かどうかを確かめることをしないとき、いかにたやすく惑わされるかを示すために、過去にこの種の事柄が起こるのをお許しになってきた。また、そのようなことが起こるであろうという警告が与えられるように、主はこの類いのことが起こるのもお許しになってきた。

反逆と背教は、私たちの吸う空気そのものの中にある。信仰によって無力な魂をキリストにすがりつかせない限り、私たちはその影響を受けてしまう。人々が今これほどたやすく惑わされるのなら、サタンがキリストを装い、奇跡を行うとき、彼らはどうして立っていられようか。そのとき-実際にはサタンがキリストの位格をまとい、あたかもキリストのわざを行っているかのように見せかけているだけなのに-自分こそキリストだと主張する彼の偽りの主張に、動じない者がいるだろうか。神の民を、偽キリストに忠誠をささげることから引きとめるものは何か。「彼らの後を追ってはならない。」

教理ははっきりと理解されなければならない。真理を宣べ伝えることに任命された人々は、しっかりと錨を下ろしていなければならない。そうすれば、錨が堅く船を繋ぎ止めるので、彼らの船は嵐や暴風に耐えるだろう。欺きはますます増えるので、私たちは反逆を反逆と呼ばなければならない。私たちはすべての武具を身に着けて立つべきである。この闘いにおいて、私たちが相対するのは人間だけではなく、もろもろの支配と権威である。私たちの格闘は血肉に対するものではない。エペソ人への手紙6章10節から18節を、私たちの諸教会で注意深く、厳粛に朗読させなさい。Notebook Leaflets, 57, 58.